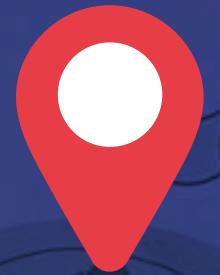


迷わないデータ基盤づくり

課題別・セゾンテクノロジー7製品 ナビゲーションブック

Navigation Book



課題別・ セゾンテクノロジー 7製品 ナビゲーションブック INDEX

01 *Topic* / データ活用は重要。
でも、どこから手をつけるべきか？

02 *Topic* / データ連携方式の違いと選定の視点
—「何ができるか」ではなく
「何に向いているか」で考える

プログラム連携(RPC/Socket/CLI/独自プログラム など)
サービス連携(REST/SOAP/ESB など)
メッセージ連携(MQ/JMS など)
DB連携(RDBMS/DWH など)
ストレージ連携(NAS/NFS/クラウドストレージなど)
ファイル連携(HULFT/FTP/全銀手順 など)

03 *Topic* / 方式は使い分け、
そして組み合わせる

04 *Topic* / セゾンテクノロジー
7製品の役割と位置づけ

05 *Topic* / 迷わない
データ基盤づくりのために

01 *Topic* / データ活用は重要。 でも、どこから手をつけるべきか？



DX推進や生成AI活用の広がりにより、「データをどう活かすか」は多くの企業にとって避けて通れないテーマになっています。

一方で、こんな悩みもよく耳にします。

- データ活用に取り組みたいが、
何から始めるべきかわからない
- ツールの選択肢が多く、
自社に合うものが判断できない
- 連携・統合・管理など、
役割の違いが整理できていない

企業内のデータは、オンプレミス、クラウド、メインフレームなど多様な環境に分散しています。AIやBIの導入を検討していても、その前提となるデータ連携や基盤整備が十分でないケースも少なくありません。

当社は、こうした複雑なデータ環境において、確実かつ効率的にデータを扱う仕組みづくりをご支援してきました。ファイル転送、システム間連携、クラウド統合、データカタログなど、さまざまな領域で製品とノウハウを提供しています。また、それらさまざまな製品群と導入支援を組み合わせ、企業

のデータ活用をトータルにサポートするサービスも行っています。

ただ、製品群が増えるにつれ、お客様から「何を使えばいいのかわかりにくい」「違いがわからない」といったお声もいただくようになりました。

そのお声に応えるために作成したのが、データ基盤づくりで迷わないためのガイド「課題別・セゾンテクノロジー7製品 ナビゲーションブック」です。



本書で分かること

本書では、企業のデータ基盤を検討する際に押さえておきたいデータ連携方式と製品の役割について整理します。

本書を読むことで、以下のポイントを理解できます。

- データ連携方式の違いと、それぞれの特徴
- データ連携基盤を選定する際の考え方
- 当社製品群の役割と位置づけ
- 自社の課題に応じたデータ基盤構成のヒント

データ活用の第一歩は“迷わない基盤づくり”から。本書がそのナビゲーションになれば幸いです。

まずは、全体像を整理してみましょう

データ活用の課題は企業ごとに異なりますが、多くの場合、「データ規模」と「求めるスピード」の違いによって、最適なアプローチは変わります。

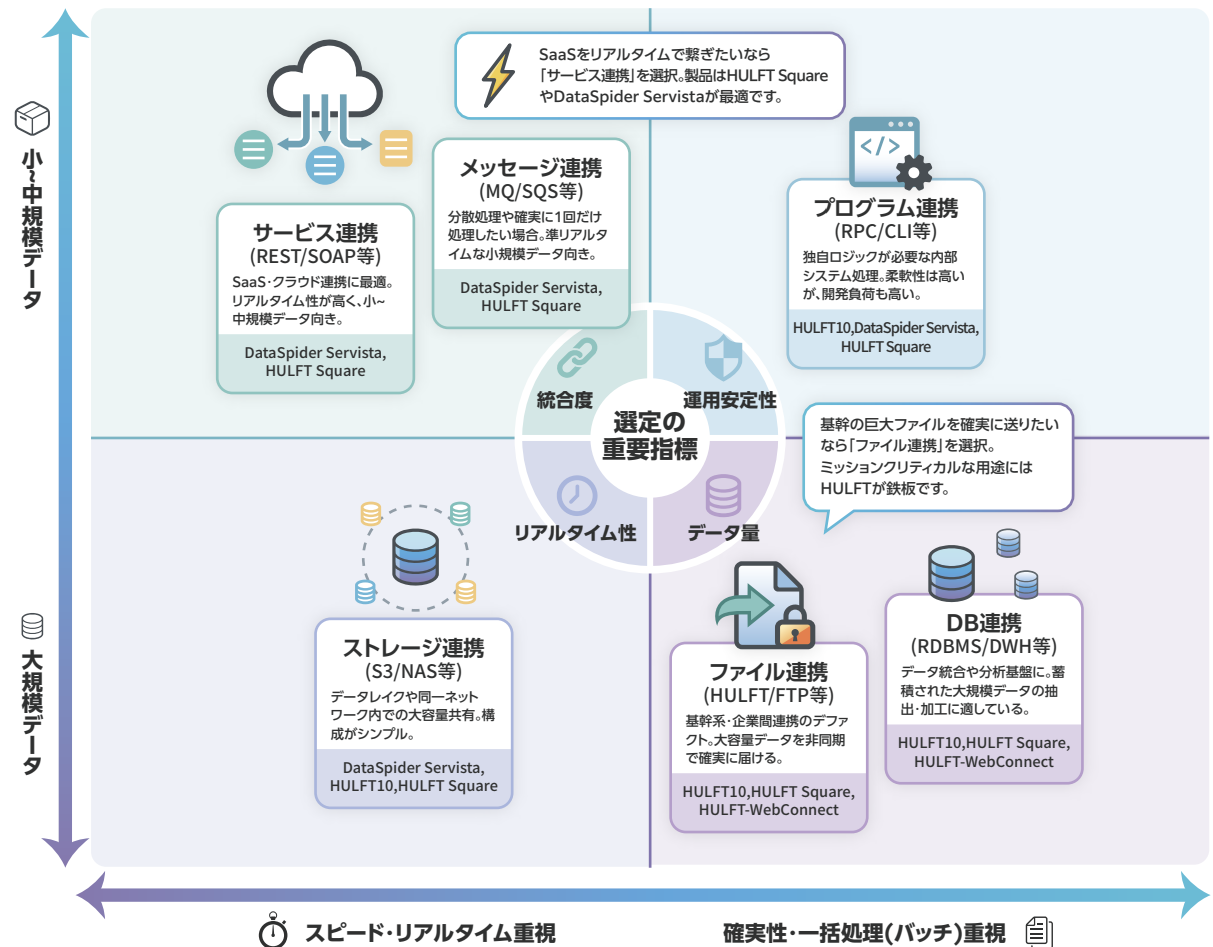
リアルタイムでつなぐのか。確実性を重視して一括処理するのか。小～中規模データなのか、大規模基盤なのか。

当社の7製品は、それぞれ強みを発揮する領域が

異なります。以下のマップは、それらを一目で整理したものです。まずは、自社の現在地を探してみてください。

本書では、このマップをもとに、課題別に最適なプロダクトをご紹介します。次の章からは、それぞれの連携方式について、もう少し具体的に

見ていきます。技術的な観点も含めて整理していますが、すべてを理解する必要はありません。自社の課題に近い章から読み進めていただければ、必要な選択肢が自然と見えてきます。



02 *Topic*

データ連携方式の違いと選定の視点 —「何ができるか」ではなく「何に向いているか」で考える



前章のマップで全体像を整理しました。ここからは、それぞれの連携方式の特徴をもう少し具体的に見ていきます。

ただし、覚えておいていただきたいのは一つだけです。

「どの方式が優れているか」ではなく、「自社の要件にどの方式が合っているか」が重要だということ。何を重視するかによって、選ぶべき方式は自然と決まります。代表的な連携方式を“選定の視点”で分解すると以下のとおりです。

リアルタイム性

(即時応答が必要か/バッチ処理でよいか)

データ量

(小容量の頻繁通信か/大容量の一括転送か)

結合度

(システム同士を密に結びつけるか/疎結合に保つか)

通信主体

(相手が取りに来るか/自ら送るか)

運用安定性

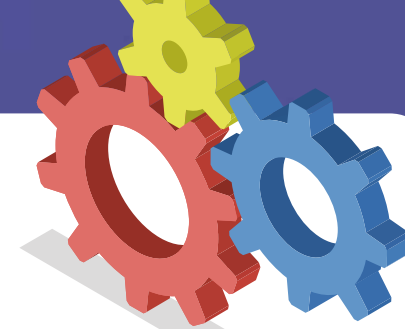
(再送制御・履歴管理・確実に1回だけ処理する保証など)

これら5つの観点から、代表的な連携方式を整理していきます。



WHAT'S CASE

- 1 プログラム連携**
RPC/Socket/CLI/
独自プログラム など
- 2 サービス連携**
REST/SOAP/ESB など
- 3 メッセージ連携**
MQ/JMS など
- 4 DB連携**
RDBMS/DWH など
- 5 ストレージ連携**
NAS/NFS/クラウドストレージなど
- 6 ファイル連携**
HULFT/FTP/全銀手順 など



プログラム連携 (RPC/Socket/CLI/独自プログラム など)

柔軟に作り込めるが、
設計・保守の負荷も大きい方式

アプリケーション同士が直接処理を呼び出す方式です。柔軟性が高く“なんでもできる”反面、処理ロジックや例外制御、再送制御などを自ら設計・実装する必要があり、開発・保守の負荷は大きくなります。

| | |
|---------|------------------|
| リアルタイム性 | 高い |
| データ量 | 小～中規模 |
| 結合度 | 高い(密結合) |
| 通信主体 | 呼び出し元が実行 |
| 主な用途 | 即時応答系処理、内部システム処理 |

向いてるケース

- 内部システム間で密接な制御が必要な場合
- 即時応答が求められる業務処理
- 既存アプリケーションに直接組み込みたい場合
- 独自要件が強く、既成の連携方式では実現しづらい場合

避けたいケース

- ✕ 部門間・企業間など責任分界を明確にしたい連携
- ✕ 再送制御やエラー管理を標準化したい場合
- ✕ 長期運用を前提とし、保守負荷を抑えたい場合
- ✕ 連携先の変更が頻繁に発生する可能性がある場合
(理由: 密結合になりやすく、設計変更の影響が大きいため)

当社対応製品

HULFT10

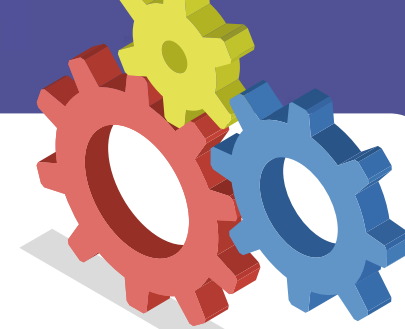
ファイル連携(送信/受信)の前後でバッチプログラムやシェルスクリプト、各種コマンド実行によるプログラム連携が可能です

DataSpider Servista

コマンドラインや独自プログラムからDataSpider Servistaのスク립トを起動できるほか、DataSpider Servistaのスク립ト内からコマンドラインや独自プログラムを実行することもでき、双方向のプログラム連携が可能です

HULFT SQUARE

HULFT Squareのスク립ト内からAWS Lambdaを用いたプログラム連携が可能です



サービス連携 (REST/SOAP/ESB など)

APIで柔軟につなぐ、 クラウド連携の中核となる方式

APIを介してサービス単位で連携します。呼び出し側がリクエストを送り、レスポンスを受け取るモデルが基本となるため、即時応答性に優れます。

| | |
|---------|----------------------|
| リアルタイム性 | 高い |
| データ量 | 小～中規模 |
| 結合度 | 中 (疎結合設計が可能) |
| 通信主体 | 取得型 (相手から取りに来る方式が中心) |
| 主な用途 | SaaS連携、クラウド連携 |

向いてるケース

- SaaSやクラウドサービスとの接続
- 疎結合を意識した設計を行いたい場合
- リアルタイムでデータ取得・更新が必要な場合
- 将来的な拡張を見据えたAPI中心の構成

避けたいケース

- ✕ 大容量データを一括転送する用途
- ✕ ネットワーク品質が不安定な環境
- ✕ 相手側API仕様変更の影響を受けやすい状況
(理由: 同期通信が基本であり、大容量・長時間処理には不向き)

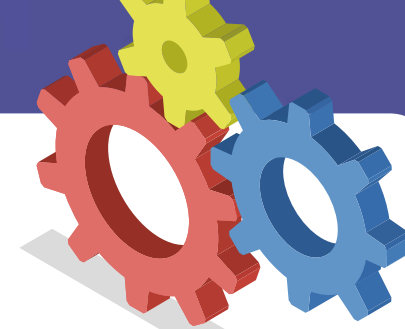
当社対応製品 両製品の違いについては次章を参照してください

**DataSpider
Servista**

REST, SOAP等のAPIを用いた
本格的なサービス連携が可能です

**HULFT
SQUARE**

REST, SOAP等のAPIを用いた
本格的なサービス連携が可能です



メッセージ連携(MQ/JMS など)

非同期で安定運用を実現する、 分散処理向けの方式

メッセージキューを介して非同期で処理を行います。処理を並列分散させたり、特定の1つの処理系だけに実行させたりといった制御が可能です。また、処理が成功するまでキューから削除されない仕組みにより、「確実に1回だけ処理する」要件に適しています。

| | |
|---------|-----------------|
| リアルタイム性 | 準リアルタイム |
| データ量 | 小～中規模(高頻度) |
| 結合度 | 低い(非同期・疎結合) |
| 通信主体 | 送信側がキューに投入 |
| 主な用途 | 分散処理、トランザクション処理 |

向いてるケース

- 処理を非同期で分散させたい場合
- トランザクション整合性や確実な処理が重要な場合
- ピーク時の負荷を平準化したい場合
- システム間を疎結合に保ちたい場合

避けたいケース

- ✕ 即時応答が必須の同期処理
- ✕ シンプルな一方向データ転送のみで十分な場合
- ✕ メッセージ基盤の運用管理体制が整っていない場合
(理由: キュー管理や監視設計が必要になるため)

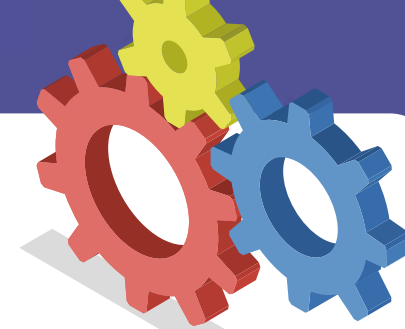
当社対応製品 各製品の詳細な機能の違いについては次章で整理します。

DataSpider
Servista

JMSプロトコルおよびAmazon SQSを用いた
メッセージ連携が可能です

HULFT
SQUARE

Amazon SQSを用いた
メッセージ連携が可能です



DB連携(RDBMS/DWH など)

データを蓄積・加工しながら活用する 基盤型の方式

データはデータベースに永続化されるため、集計や条件抽出、結合処理などのデータ加工が容易です。データ分析基盤やDWH、ECサイトの注文管理など、極めて多くの業務領域で活用されています。

| | |
|---------|-------------------|
| リアルタイム性 | バッチ/準リアルタイム |
| データ量 | 中～大規模 |
| 結合度 | 中 |
| 通信主体 | 取得型(抽出処理) |
| 主な用途 | データ統合、分析基盤、業務処理基盤 |

向いてるケース

- データ統合・集約基盤を構築したい場合
- 分析・BI・AI活用を前提としたデータ整備
- 条件抽出・集計・加工処理が必要な場合
- 履歴管理や永続化が重要な場合

避けたいケース

- ✕ ミリ秒単位の即時応答が必要な業務処理
- ✕ 小規模・単発のデータ受け渡し
- ✕ DB負荷を極力増やしたくない基幹環境
(理由:蓄積前提であり、即時トリガー処理には向かない)

当社対応製品 各製品の詳細な機能の違いについては次章で整理します。

**DataSpider
Servista**

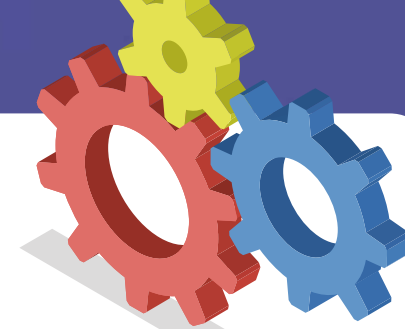
Oracle Databaseなど主要なRDBMS製品、Snowflakeなどの主要なDWH製品、およびJDBCドライバが提供されている各種データベース製品とのCRUD操作やストアプロシージャ実行による本格的なデータベース連携が可能です

**HULFT
SQUARE**

Oracle Databaseなど主要なRDBMS製品、Snowflakeなどの主要なDWH製品とのCRUD操作や、一部のデータベース製品でのストアプロシージャ実行による本格的なデータベース連携が可能です

DataMagic

Oracle Databaseなど主要なRDBMS製品、Snowflakeなど一部のDWH製品、およびODBCを用いた各種データベース製品とのデータ登録・更新・取得操作が可能です



ストレージ連携(NAS/NFS/クラウドストレージなど)

共有領域を活用して 大容量データを扱うシンプルな方式

共有ストレージを介してファイルを受け渡す方式です。構成はシンプルですが、排他制御やアクセス管理設計が重要になります。内部システム間のデータ共有で広く利用されています。

| | |
|---------|---------------------------|
| リアルタイム性 | バッチ中心 |
| データ量 | 大容量 |
| 結合度 | 低～中 |
| 通信主体 | 共有領域への配置／取得 |
| 主な用途 | 同一ネットワーク内の大容量データ共有、データレイク |

向いてるケース

- 大容量ファイルの受け渡し
- データレイク構築
- 同一ネットワーク/クラウド内でのデータ共有
- バッチ処理中心の運用

避けたいケース

- ✕ 排他制御が厳密に求められる高頻度更新
- ✕ リアルタイム双方向通信
- ✕ アクセス権限管理が複雑な多組織連携
(理由: 共有型のため、制御設計を誤ると競合が発生しやすい)

当社対応製品 各製品の詳細な機能の違いについては次章で整理します。

DataSpider
Servista

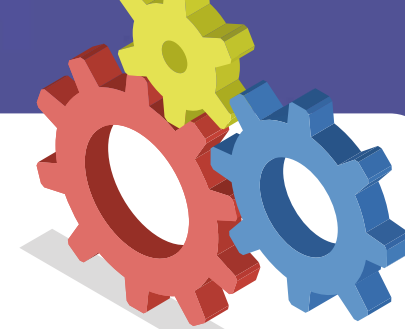
ファイルシステムのマウントによるNFS連携や、Amazon S3 など主要なクラウドストレージとの連携など、本格的なストレージ連携が可能です

HULFT
SQUARE

Amazon S3 など主要なクラウドストレージとの基本的なストレージ連携が可能です

HULFT10

Amazon S3 など主要なクラウドストレージ上のデータをファイル連携(送信/受信)することが可能です



ファイル連携 (HULFT/FTP/全銀手順 など)

確実性を重視する

基幹系・企業間連携の定番方式

ファイル単位でデータを受け渡す方式です。連携相手と取り決めるのは「ファイルフォーマット」のみであり、「ファイルが届けば、あとはよろしく」という形で責任分界点を明確に引けるため、データの送り元と受け取り手が別部門・別会社である場合に特に適しています。

| | |
|---------|-----------------------|
| リアルタイム性 | バッチ中心 |
| データ量 | 大容量 |
| 結合度 | 低い(非同期・疎結合) |
| 通信主体 | 送信側(Push) / 受信側(Pull) |
| 主な用途 | 基幹系連携、企業間連携 |

向いてるケース

- 企業間連携や部門間連携
- 大容量データの定期転送
- 責任分界を明確にしたい場合
- 高い信頼性・再送制御が求められる業務

避けたいケース

- ✗ 即時レスポンスが必要な双方向処理
- ✗ 細かい単位で高頻度更新する用途
- ✗ APIベースで動的に処理したいクラウド連携
(理由: 基本的にバッチ型・ファイル単位処理であるため)

当社対応製品 各製品の詳細な機能の違いについては次章で整理します。

HULFT10

HULFT転送プロトコルを用いた本格的なファイル連携が可能です

HULFT WebConnect

HULFTを用いたインターネット経由での本格的なファイル連携が可能です

DataSpider Servista

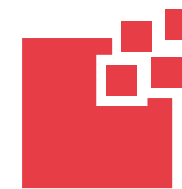
FTP/SFTP/FTPSを用いた基本的なファイル連携が可能です。またDataSpider ServistaとHULFTとの製品連携による本格的なファイル連携にも対応することができます

HULFT SQUARE

FTP/SFTP/FTPSを用いた基本的なファイル連携、およびHULFT転送プロトコルを用いた本格的なファイル連携が可能です

03 *Topic*

方式は使い分け、 そして組み合わせる



このように、連携先のシステムやサービスの種類、ネットワーク環境、業務要件などによって、適切なデータ連携方式は異なります。

- リアルタイム性を重視するのか、それとも確実性を優先するのか。
- 小さなデータを頻繁にやり取りするのか、大容量データをまとめて安全に届けるのか。
- APIで取得したデータを加工し、最終的にファイルとして基幹系へ受け渡すのか。
- クラウドサービスとはリアルタイムに接続しつつ、夜間には大容量データを一括転送するのか。

当社は、これら性質の異なる連携方式を単体で提供するだけでなく、組み合わせで設計できる製品群を備えています。

重要なのは、製品単体の機能ではなく、「どの方式を、どう組み合わせるか」という設計思想です。

データ連携基盤を選定する際の考え方 *Check* 方式選定チェックリスト(5つの質問)

まずは、自社の要件を整理してみましょう。以下の質問に「どちらに近いか」で答えてみてください。
多く当てはまる項目が、検討すべき方式のヒントになります。

Q1 即時応答は必要ですか？

- ユーザー操作や業務処理の中で即時応答が必要
- 数分～数時間単位のバッチ処理でも問題ない

A ▶ 即時応答が必要 → **プログラム連携/サービス連携**
バッチ中心 → **ファイル連携/ストレージ連携/DB連携**

Q2 扱うデータ量はどの程度ですか？

- 小～中規模データを高頻度でやり取りする
- 大容量データをまとめて転送・蓄積する

A ▶ 小～中規模・高頻度 → **サービス連携/メッセージ連携**
大容量一括処理 → **ファイル連携/ストレージ連携/DB連携**

チェック結果の考え方

1つの方式だけで完結するケースは多くありません。実際のデータ基盤では、複数方式を組み合わせるのが一般的です。
例えば: APIで取得 → DBに蓄積 → 夜間にファイル転送/SaaSとはリアルタイム連携 → 基幹系とはバッチ連携
非同期キューで安定化 → 最終的にDWHへ統合

重要なのは、「製品」から考えるのではなく、「要件」から考えること。

次章では、こうした方式の違いを踏まえ、当社7製品がどの役割を担うのかを整理していきます。

Q3 システム間の結合度はどうあるべきですか？

- 密接に連携し、一体として動作させたい
- できるだけ疎結合に保ち、影響範囲を限定したい

A ▶ 密結合でもよい → **プログラム連携**
疎結合を重視 → **サービス連携/メッセージ連携/ファイル連携**

Q4 処理の確実性・再送制御はどの程度重要ですか？

- 失敗時の再送や履歴管理を厳密に行いたい
- ある程度アプリ側で制御できればよい

A ▶ 高い確実性が必要 → **メッセージ連携/ファイル連携**
アプリ制御中心 → **プログラム連携/サービス連携**

Q5 データは“活用基盤”に蓄積しますか？

- 分析・AI活用を前提に蓄積・加工したい
- 主に業務処理のための受け渡し

A ▶ 蓄積・活用前提 → **DB連携(DWH含む)**
受け渡し中心 → **他方式が中心**

04 *Topic*

セゾンテクノロジー 7製品の役割と位置づけ



HULFT SQUARE

(ハルフトスクエア)

クラウド時代の統合連携プラットフォーム

HULFT Square は、クラウドネイティブなiPaaS型データ連携基盤です。

ITの世界は「所有」から「利用」へと大きくシフトしています。SaaSやクラウドサービスの導入は急速に拡大し、CRM、会計、人事、マーケティングなど多くの業務領域でクラウド活用が進んでいます。連携対象の多くがクラウド上に存在するケースも多く、そうしたクラウド中心のシステム構成においては、インフラ構築や保守を自社で担うことなく、迅速に立ち上げられるフルマネージド型のデータ連携基盤が求められます。

一方で、基幹システムや機密データは依然としてオンプレミス環境に存在するケースも多く、オンプレミスとクラウドが共存する「ハイブリッド環境」も一般的です。この環境では、クラウドとオンプレミスを安全かつ確実に接続できることが前提となります。

HULFT Square は、クラウド型データ連携基盤でありながら、HULFT の機能をそのまま備えており、オンプレミス環境との高信頼な連携も可能です。DataSpiderの設計思想を継承した連携機能に加え、HULFTの強固な転送技術も統合したフルマネージド型の統合連携基盤として、特にクラウドとオンプレミスが共存する環境において強みを発揮するプラットフォームです。

● 特長

- ・クラウド/オンプレミス統合
- ・SaaSアプリケーション接続
- ・API中心設計
- ・スケーラブルな処理基盤
- ・GUIによる直感的な開発環境

● 導入効果

- ・インフラ構築・保守負荷の軽減
- ・連携基盤の迅速な立ち上げ
- ・SaaS活用の加速

DataSpider Servista

(データスパイダーサービス)

業務システム間の柔軟なデータ統合

DataSpider Servista は、ノーコード/ローコードで構築可能なデータ連携ツールです。

SaaSの増加やクラウド移行の進展により、企業内の連携ポイントは急増しています。API連携、データベース接続、ファイル転送、Webサービス連携など方式も多様化し、システムごとに接続方法や開発手法が異なる状況が生まれており、個別開発では限界が生じています。

このような状況では、接続方式やプロトコルが異なっても、同一の設計思想・開発手法で標準的に構築できるデータ連携基盤が不可欠です。

また、実際の業務では、取得したデータをもとに加工や集計を行い、条件分岐や繰り返し処理、例外処理、さらにはマルチスレッド処理などを実装する必要があります。業務要件に応じた“作り込み”が

求められる一方で、開発効率や保守性も確保しなければなりません。

つまり、柔軟なロジック構築が可能でありながら、視覚的かつ標準化された方法で開発できるノーコード型データ連携ツールが必要とされます。

●特長

- ・豊富なアダプタ群により、多様なシステムやデータソースに標準対応
- ・GUIベースの直感的な開発環境により、設計内容を可視化
- ・ETL処理に対応し、データ加工・変換・集計を実装可能
- ・条件分岐、繰り返し、例外処理などの業務ロジック構築
- ・エラーハンドリング機能による安定運用
- ・スケジュール実行やイベントトリガーによる自動化

●導入効果

- ・属人化の排除とナレッジの可視化
- ・連携仕様の標準化
- ・開発期間の短縮
- ・変更対応の迅速化
- ・運用負荷の軽減
- ・ハイブリッド環境における統合連携の実現
- ・将来的な拡張にも対応可能なスケーラビリティ

HULFT10

(ハルフト)

ミッションクリティカルを支える ファイル転送基盤

HULFT は、業務システム間のデータ連携を支えるファイル転送ミドルウェアです。

API連携が普及する一方で、基幹系や大容量データ連携においてはファイル転送が依然として主流です。販売・物流・会計・生産管理などのシステム間で日々やり取りされるデータは、正確に、確実に、そして止まることなく届けられることが前提です。これらは「止められない」処理であり、転送の失敗は即業務停止につながります。

ネットワーク障害や一時的なエラーが発生しても再送できること、転送結果を確実に確認できること、異なるOSやプラットフォーム間でも安定して連携できること。こうした“当たり前”を確実に実現する基盤がなければ、業務そのものが停止してしまいます。HULFT は、長年にわたり企業間・拠点間連携を支え続けてきた高信頼なファイル転送基盤として、ミッションクリティカルなデータ連携を担います。

●特長

- ・自動再送やチェックポイント機能による確実な転送
- ・転送前後のジョブ連携による業務プロセス統合
- ・暗号化・整合性チェック・操作ログによる高いセキュリティ
- ・メインフレームからLinux/Windowsまで対応するマルチプラットフォーム
- ・運用ツールや統合管理基盤との連携

●導入効果

- ・基幹業務を止めない安定したデータ連携の実現
- ・障害時の迅速な復旧と運用負荷の軽減
- ・異なるシステム間の連携標準化
- ・内部統制や監査対応の強化
- ・長期的に安心して利用できる連携基盤の確立

HULFT-HUB

(ハルフトハブ)

HULFTネットワークを統合する運用基盤

HULFT-HUB は、分散した HULFT 環境を統合し、可視化と集約を実現する統合運用基盤です。HULFTは、基幹系から情報系、社内外連携まで幅広いシステム間連携に活用されています。導入が進むにつれ、サーバ台数や転送経路が増加し、設定

変更や障害対応の負荷も高まる傾向にあります。

各サーバへ個別にアクセスして設定や履歴を確認する運用では、影響範囲の把握や原因特定に時間を要する場合があります。また、セキュリティや内部統制の観点からも、管理の一元化が求められます。

こうした大規模・分散環境において、HULFTネットワーク全体を俯瞰し、統合的に管理できる基盤が必要とされています。

HULFT-HUB は、複数のHULFTを一元管理し、転送状況の可視化や設定情報の集約を可能にします。さらに、中継や蓄積機能により可用性を高め、コード変換や各種処理の集約にも対応します。大規模環境におけるHULFT運用を支える統合基盤です。

● 特長

- ・複数HULFTの統合管理
- ・転送状況の可視化
- ・設定情報の一括編集・配布
- ・中継・蓄積による安定運用
- ・セキュリティ強化
- ・コード変換・処理の集約

● 導入効果

- ・運用管理工数の削減
- ・障害復旧時間の短縮

- ・転送経路・利用状況の可視化
- ・停止影響を抑えた安定運用
- ・運用標準化と統制強化

DataMagic

(データマジック)

異種環境をつなぐデータ変換エンジン

DataMagic は、メインフレーム、オープン系、クラウドなど、異なるプラットフォーム間に存在するデータ形式の差異を吸収し、システム間連携を成立させるデータ変換ツールです。

企業の基幹業務は今なおメインフレーム上で稼働することも多く、その周辺ではオープン系システムやクラウド、SaaSが活用されています。こうした環境が共存する構成では、文字コード(EBCDIC/UTF-8 など)、固定長・可変長形式、レコード構造、改行コードといった仕様の違いが障壁となり、データをそのまま受け渡すことはできません。

データ転送そのものは実現できても、受け取り側で扱える形式に整えられていなければ、連携は成立しません。異なる世界のあいだに横たわる“形式の壁”をどう乗り越えるかが、安定したシステム連携の鍵となります。

● 特長

- ・メインフレームデータ(EBCDIC 等)を含む各種コード変換に対応
- ・固定長/可変長変換やレコード編集機能
- ・ホスト形式データの加工・再構成
- ・大量データ処理に適した高性能バッチ基盤
- ・HULFTとの組み合わせによる、安全な転送と確実な変換の両立

● 導入効果

- ・異種プラットフォーム間連携の安定化
- ・インターフェース開発・保守負荷の軽減
- ・メインフレーム資産を活かしたシステム拡張
- ・データ品質の安定確保と再処理リスクの低減

HULFT WebConnect インターネット経由の連携

HULFT-WebConnect は、インターネット経由で安全にHULFT連携を実現するクラウド型サービスです。

企業間連携の基盤として広く利用されているHULFTですが、HULFTによる通信は、安全な企業

内ネットワーク内での転送(内接)、もしくは専用線やVPNを前提とした社外転送(外接)が基本となります。外接先が限定的であれば大きな課題にはなりません。HULFTで通信したい相手が多数にのぼる場合、接続先ごとに回線やVPNを個別に構築・管理する必要が生じ、コストや運用負荷が増大します。

また、HULFTは双方に製品環境が必要であることも前提条件です。相手先に構築体制がない場合には、連携そのものが難しくなるケースもあります。

こうした従来の外接の前提を見直し、専用線やVPNが不要でありながらも、インターネット経由で安全にHULFT連携を実現する仕組みがHULFT-WebConnectです。

● 特長

- ・HTTPSによる暗号化通信で安全なインターネット接続を実現
- ・通信経路とデータ自体を保護する二重暗号に対応
- ・専用線・VPNや受信ポート開放が不要
- ・D-Clientにより相手にHULFT環境がなくても転送可能
- ・クラウド型サービスで構築・保守の負担を軽減

● 導入効果

- ・外接先が多い環境でも回線費用・構築工数を削減
- ・多数の取引先との連携を迅速に開始
- ・IT体制が限定的な相手とも安全に接続
- ・既存HULFT資産を活かしながら接続範囲を拡張
- ・運用負荷を抑えた持続可能な連携基盤を確立

HULFT DataCatalog

(ハルフト データカタログ)

データ資産を可視化する データカタログ基盤

HULFT DataCatalog は、社内に点在するデータ資産を横断的に可視化・整理するメタデータ管理プラットフォームです。

データドリブン経営や高度な分析、さらには生成AIの活用が進む中で、企業にとっての競争優位の源泉は「データ」そのものにあります。分析やAIの精度は、どれだけ有用で信頼できるデータを活用できるかによって大きく左右されます。

しかし、データは単に蓄積されているだけでは価値を発揮しません。どこにどのようなデータが存在し、どの程度蓄積され、どのような意味や定義を持つ

のかを把握できてはじめて、活用の土台が整います。また、生成AIに投入してはならない機密情報や個人情報を適切に識別・管理することも重要です。

HULFT DataCatalog は、分散するデータ資産のメタ情報を収集・整理し、所在・意味・利用状況を可視化することで、日常的なデータ活用から生成AI活用までを支える基盤を提供します。

● 特長

- ・社内外に分散するデータ資産を横断的に収集・可視化
- ・メタデータの一元管理と検索機能
- ・データ項目の定義や更新状況を把握可能
- ・データ連携基盤との連動による活用促進
- ・機密性を踏まえたデータ管理を支援

● 導入効果

- ・データ探索時間の短縮と業務効率向上
- ・部門横断でのデータ活用促進
- ・信頼できるデータに基づく意思決定の強化
- ・生成AIや分析基盤活用の精度向上
- ・持続可能なデータ活用基盤の確立

05 *Topic*

迷わない データ基盤づくりのために



いかがでしたでしょうか？ 貴社の課題に応じて、「どの役割をどの基盤で担うのか」が整理できてきましたか？

本書では、代表的なデータ連携方式と、それぞれに適した当社製品の役割をご紹介します。

ファイル転送、データ統合、クラウド連携、運用管理、データ変換、外部接続、データ可視化といった機能を組み合わせることで、企業は自社の要件に応じた柔軟なデータ基盤を構築できます。

データ基盤は、単一の製品だけで完結するものではありません。それぞれの役割を理解し、適切に組み合わせることが、安定したデータ活用の第一歩となります。

本書が、貴社にとって最適なデータ基盤を検討する際の第一歩となれば幸いです。



データ連携基盤検討のチェックポイント

次のような課題に心当たりはないでしょうか。

- ✓ システムごとに個別の連携が増え、全体像が把握しづらい
- ✓ API連携・ファイル連携・バッチ処理が混在している
- ✓ クラウドとオンプレミスのデータ連携が複雑化している
- ✓ システムごとに連携方式や開発手法が異なっている
- ✓ データ連携の運用や障害対応が属人化している
- ✓ 社内にどのようなデータ資産があるのか把握できていない

こうした状況は、多くの企業で共通して見られる課題です。データ連携の方式や基盤を整理し、役割ごとに適切な仕組みを整えることで、データ活用の土台となる安定したデータ基盤を構築できます。データ基盤の整理や最適な構成についてお悩みの際は、ぜひセゾンテクノロジーまでお気軽にご相談ください。

SAISON
TECHNOLOGY

株式会社セゾンテクノロジー

<https://www.saison-technology.com/service/product/>

● HULFT、その他HULFT関連製品は、株式会社セゾンテクノロジーの登録商標または商標です。● 記載されているシステム名、製品名などには、必ずしも商標表示（TM、®）を付記していません。

このカタログの記載内容は、2026年4月現在のものです。本カタログの記載内容は予告なく変更することがあります。©Saison Technology Co.,Ltd. 2026

お問い合わせ

<https://www.saison-technology.com/contact/dataintegration/>